

キャンパスでの活動にみる大学生によるラーニング・コモンスの位置づけ

原 修 (立教大学図書館) hara@rikkyo.ac.jp

I. 研究の背景と目的

文部科学省の調査¹⁾によると、国内の大学において、ラーニング・コモンス (以下 LC) の設置数は増加傾向にある。LC に対しては、その定義や必要とされる要素にある程度の共通認識はあるものの、米澤は“標準的・規範的なモデルはない”²⁾とした。現状としても、管理主体や提供サービス、設置の形態等、その在り方は大学により様々である。

LC の設置数増加に併せ、LC の利用状況を調査する文献も増加している³⁾。但し国内では利用者数の定量的な調査や、当該施設のみを対象として利用の現状を調査した事例が多い。

これに対して、Foster らは Rochester 大学において、学部学生支援のため、その習慣やニーズの把握を目的に、インタビューやワークショップ、日記・写真・地図を使った調査等、様々な手法を用いて、調査の枠を特定の場所や学習活動のみに留めず、オープンな視点からの調査⁴⁾を行った。その結果、大学生の実際の活動を鮮明に引き出し、学習の実践に対する示唆を得ることに成功している。

本調査では、LC が様々な形態で普及した今日の状況下で、キャンパス内の複数の LC を対象に大学生の活動を調査し、利用状況の比較を行う。更に LC の利用や活動実態をより広い文脈から捉えるために、Foster らの調査方針を採用し、大学生のキャンパス全体での 1 日の活動を調査する。本研究では、これらの調査をもとに、大学生にとっての LC の位置づけを明らかにすることを目的とする。

II. 調査対象と方法

A. 調査対象

調査は、立教大学池袋キャンパス全域、及び

図書館内の LC である「ラーニング・スクウェア」(以下「スクウェア」と、キャンパス内で独立した施設である「メーザー・ラーニング・コモンス」(以下「メーザー」)を中心に据えて調査を行った。それぞれの LC は、第 1 表に示される通り、その建物(設置場所)、管理部局、規模、サービスや飲食の規制等も異なる。

第 1 表 LC 比較表

名称	ラーニング・スクウェア		メーザー・ラーニング・コモンス	
建物 フロア	ロイドホール (池袋図書館)1F/2F		メーザーライブラリー記念館 2F/3F(2F が入口)	
管理部局	図書館		メディアセンター (総務部)	
管理体制	ラーニング・スクウェアエリア に管理者は不在も 図書館カウンタが隣接 しスタッフが常駐		入口脇に PC 貸出カウンタ があり管理を兼ね 学生アルバイト等が常駐	
授業期間 の主な 利用 時間	平日 8:45-22:45 土 8:45-20:00 日祝 10:00-17:00		平日 8:45-19:00 土 8:45-17:00 日祝閉室	
利用 環境	図書館への入館時 に学生証等でゲート 認証必要		入館のための 認証は不要	
PC	固定	設置なし	固定	PC10 台 ラウンジ席の 一部に設置
	ノート	貸出有 (約 300 台)	ノート	貸出有 (約 200 台)
座席数	1F	可動 54 席	2F	固定 78 席 可動 24 席
	2F	可動 42 席	3F	固定 78 席 可動 34 席
	計 96 席		計 214 席	
備品	ホワイトボード 32 インチプロジェクタ		ホワイトボード 50/21 インチディスプレイ 備付型プロジェクタ カラー/モノクロプリンタ デスクトップ PC	
飲食	食物	持込不可	食物	可
	飲物	蓋付き容器のみ可	飲物	可 (制限無)

B. 調査方法

調査は、1 日の活動を確認するマッピングダイアリー調査と、2 つの LC における観察調査の、2 つの方法を採用した。

1. マッピングダイアリー調査

Fosterらは地図を使った調査⁴⁾であるマッピングダイアリーにより、これまで見えていなかった学生の活動を浮き彫りにすることを可能とした。これは大学生の1日の活動を具体的に地図上に記入し提出してもらい、その活動の意味を後日インタビューで確認する手法である。

マッピングダイアリー調査には、第2表のA～Fの7名の協力学生を得た。調査依頼には休日や試験期間を避けた通常授業期間に実施するという条件を付し、謝礼を提供した。

第2表 マッピングダイアリー調査協力学生

学生	学部	学年	性別	マッピングダイアリー 実施日時・学期
A	理	3	女	5/28(月)・春
B	社会	4	男	5/29(火)・春
C	文	3	女	6/12(火)・春
D	経営	3	女	7/13(金)・春
E	経営	3	男	7/10(火)・春
F	文	3	女	11/8(木)・秋
G	異文化 コミュニケーション	3	女	11/15(木)・秋

2. 観察調査

この2つのLCに対し、第3表の通り観察を実施した。調査は観察に連続性を持たせるために、開館から閉館までの終日で実施した。

第3表 LCの終日観察日と時間

観察日	ラーニング・ スクウェア	メーザー・ラーニ ング・コモンズ
6/28(木)	8:45-22:30 / 13h45m	
6/30(土)	8:45-22:30 / 11h15m	
7/12(木)	8:45-19:00 / 10h15m	

観察日は各LC内に観察用の机を設置し、職員の名札を着用し着席した。机の上には観察中であることも明示したが、特に利用者には関心を寄せられず、異質なものとして認識はされなかった。観察時は活動のメモを取りながら、不定期に回遊して情報を収集した。また上記以外にも、複数日程で、終日ではないものの観察を実施し、合計で50時間超の観察を実施した。

III. 調査結果の分析と考察

A. マッピングダイアリー調査の分析と考察

1. 学生の主な特徴的な活動

学生の活動日の調査と事後のインタビューからは、想定を超えた学生の動きと、予想していない場所での学習が判明した。なかでも特徴的であった学生から3名の活動を以下に記す。

学生A:理学部の研究棟を中心とした活動がなされていた。昼食も当該学科学生の利用が主となる実験室付近の廊下でとり、昼食後の空き時間も、そのまま実験室内で、友人とともに自習として課題に取り組んでいた。

学生B:自主的な学習と食事場所に、研究室棟7階のエレベータ脇にある談話用ロビーを利用していた。そこは高い頻度で使い、食事、ゼミの準備、時には友人と一緒にいるが別々の活動もする場所であるとした。

学生E:調査日はメーザーの利用が活動の中心であった。午前は友人との学習、午後はゼミでのミーティングと、別々の目的で1日に2回利用した。更にこの学生は、1人での学習も、図書館よりメーザーの利用が多いとした。

7名のマッピングダイアリー調査全体を通じ、確認できたことを次項以下に記す。

2. 学習スペースとして意図されていない場所の探知と利用の嗜好

大学生が図書館やLC以外の場所も学習スペースとして利用している状況が浮かび上がった。しかもそれらの場所のいくつかは、大学側がLCのような学習スペースの意図で提供している場所ではなかった。しかし大学生は自ら見出し、自らのニーズに合致させ、自らの居場所として好んで使う状況が見受けられた。選択理由には「人が来なくて静か」「こじんまり」また「知り合いがいる(=知らない人があまり来ない)」等のキーワードが付加されていた。

3. キャンパス内の活動からの無駄の排除

授業期間内の調査であるため、大学生は当然授業を中心にして活動する。その前提はあるが、

活動場所に対して、次の授業の教室に近い場所であるか、必要な資料に隣接している場所であるか等を、利用場所選択の判断材料とする傾向が強かった。特に LC に対しては、前項の嗜好性よりも、利便性を重視する傾向が見られた。更にキャンパス内での移動にも無駄がなく、目的のない活動がほぼ見受けられなかった。

4. LC の性格や機能への敏感な反応

LC を使わない、もしくは使いづらいとした「(メーザーは) 特定学部生が利用者の中心であり(そうでない自分は) 使わない」との否定的な意見が複数あった。反対に指摘された側の学部の所属学生はメーザーを「利用しやすい場所」と表現した。LC に醸成されるテリトリー感が、使う、使わないのいずれの判断に対しても、強い影響を及ぼしていると言える。

また「LC の利用中にイベントが開始され場所の移動を余儀なくされた(ため以後使っていない)」「(スクウェアは) 管理がきっちりしている(ので好まない)」等があり、自由な利用の希求や、管理の制約を避けたいという傾向が強く感じられた。

5. 飲食可否の要素の重要性

大学生は学習スペースに対して、飲食ができるという要素を重要視していた。特に複数人での学習時は、集中力継続や休憩時のリラックス等に「食べる」という行為が有効であり、メーザーは学習場所から移動せずそのまま食べられる場所である点で評価が高いとの発言があった。更に LC 以外の個々の学生が嗜好する場所にも、「飲食をしながら」使うとの発言や状況が伴っていた。

6. PC の用途

協力学生 7 人全員が PC を所有し、大学に持参する・しないは半々であったが、主たる連絡ツールには全員が SNS 利用を挙げ、電子メールの利用頻度は低いとされた。Foster の調査⁴⁾で目立った、電子メールのチェックを目的とし

たキャンパス内 PC 及びその設置場所の利用が、情報環境の変化で消滅したと言って良い。

新しいデバイスの普及や大学生に訴求するアプリの出現等は、短期間で拡大し、環境の変化を産み、過去の調査と異なる結果をもたらす強い要素となり得ることが判った。つまり LC の役割も、外的要因で容易に変化し得ることを、提供する側も認識する必要がある。

B. 観察調査の分析と考察

1. LC での非学習利用という捉え方

長時間の連続的な観察から、グループが滞在している時間の全てを学習だけに費やしている訳ではないことが判った。学習中のグループから異なる内容での大きな笑い声や雑談が聞こえたり、反対に単に談笑の為の利用という印象のグループが急に学習を開始したりすることは全く珍しい現象ではなかった。更に、だからスマートフォンを操作したり寝ていたりという利用者が、待合せで他の利用者が来ると学習に転じたりする等の、驚きを伴うような状況もあった。大学生の LC 利用を時間軸から捉えることで、多様な利用状況が確認できた。

管理者は、典型的なアクティブ・ラーニング・スタイルとして想像しがちな、真剣に議論しつつ学習するグループを好ましく思う傾向が強い。実際に「非学習利用」「好ましくない利用」と表現しその利用を分類していた先行研究もある。しかし調査からは、集中(学習)と弛緩(休憩時等の会話や態度)が、活動の中で反復し循環していることが判った。つまり非学習というような切り取られ方は、その観察者のタイミングによる判断に過ぎない可能性を有する。

2. LC の管理

調査の際、直接利用者の意見を採取すべく、スクウェア内にアンケートブースを設けた。それ自体は協力者が集まらず頓挫したが、その結果以上に、協力依頼を謝絶する学生の態度から、「煩わしさ」や「強い拒絶」を感知し得た。静

肅性が求められる図書館内の閲覧エリアより、開放的でやや規制が緩いLCであるにも関わらず、図書館や大学側の立場から新たな管理的介入が発生したことに、大学生が抵抗感を示したと推測する。これは前節の、LCでの厳しい管理を好まない、との学生の発言とも合致する。

そうであるならば、LCの重要な要素とされる人的支援も、利用者である大学生に対して、管理的でない形態でサービス提供されるべきであることが示唆される。

3. LC内での飲食

前節で飲食を重要視する意見があった通り、実際にもその利用状況が追認できた。スクウェアとメーザーの大きな違いの一つに食べ物の持ち込みの可否がある。持込が可能なメーザーでは、スナック菓子類の持参が相当数見られた。机上で昼食を取った後に学習が開始される等も珍しくなかった。飲料も容器の制限がなく、図書館等には持ち込めない紙容器飲料の持参も目に付いた。

スクウェアでも、観察が夏季であったこともあるが、閉館時には常にペットボトル用のゴミ箱が満杯になる状況であった。既にLCにおいて、少なくとも飲料の持ち込みは不可欠な要素であると捉え得る。

IV. まとめと課題

A. 明らかになったこと

今回の調査により、対象としたLCに対する大学生の利用の仕方の特徴が明らかになった。その要因には各LCが持つ特性があり、それが利用方法、更に利用の判断にも影響していると考えられる。大学生がLCや学習環境に希求したり回避したりする要素も確認できた。

またキャンパスにおける大学生の活動と学習状況の多様性が浮き彫りとなり、その中でのLCの位置づけも明らかになった。マッピングダイアリー調査と観察調査の二つの手法を採

用したことで、その結果が相互に裏付けられる状況も導き出すことができた。

B. 調査結果が示唆すること

調査は、これまで想定し得なかった大学生の活動の状況、例えば大学側が学習スペースとして提供していないエリアを好んで利用していたこと、飲食のニーズが予想を超えていたこと等を明らかにした。

施設やサービスを提供する側が当然と捉えていることでも、大学生はその想定を超えた判断や活動を行っていた。Fosterも同様に、その調査結果に対し“学生に対する仮定がいかにも誤っていたかを理解することができた”⁴⁾と表現している。これは調査や分析の枠を、場所や学習活動に留めなかったことで導き出された結果と捉えられる。よって本調査は、LC等の施設、またその場所での学習活動に対する、今後の調査への示唆を提示し得たと考える。

引用・参考文献

- 1) 文部科学省 研究振興局情報課. 平成 24 年度「学術情報基盤実態調査」の結果報告(概要). http://www.mext.go.jp/component/b_menu/other/_icsFiles/afieldfile/2013/03/27/1332199_2.pdf, (入手 2019-10-20).
- 2) 米澤誠. ラーニング・コモンズの本質--ICT時代における情報リテラシー/オープン教育を実現する基盤施設としての図書館(特集 ラーニング・コモンズ). 名古屋大学附属図書館研究年報. 2008, no. 7, p. 35-45.
- 3) 例えば以下をはじめとする調査が存在する。
津村光洋. 鳥取大学附属図書館のラーニング・コモンズ. 鳥取大学教育研究論集. 2011, no. 1, p. 97-102.
谷奈穂他. 図書館における学生の行動とその行動に関する環境の要素 -フォーカス・グループ・インタビューによる探索的調査-. 大学図書館研究. 2016, vol. 104, p. 55-66.
嶋田みのり. 東北学院大学ラーニング・コモンズ「コラトリエ」の利用実態からみる現状と課題. 東北学院大学教育研究所報告集. 2018, vol. 18, p. 17-30.
- 4) Nancy Fried Foster. ; Gibbons, Susan (Susan L). Studying Students : the Undergraduate Research Project at the University of Rochester. , Association of College and Research Libraries, 2007, 90p.